

令和4年度 学校評価シート

学校名： 和歌山県立和歌山東高等学校

校長名： 市川 貴英

目指す学校像・育てたい生徒像（スクールポリシー等に基づいて記載する）

校訓「自主・自律・敬愛」のもと、地域の普通科高校としての地域に求められる役割を果たすため「生徒が確実に成長すること」を第一の目標とし、「社会でよりよく生きる力を持った生徒が育つ学校」を目指す。
基礎的教養の形成と規範意識の向上から、地域社会において自他を尊重し多様な人々と協働できる生徒を育て、健全で持続的な発展を担う職業人として地元和歌山で活躍する人材を育成する。

学校評価の公表方法

自校ホームページに掲載

| | | | |
|--------|---|------------|---------|
| 現状・進捗度 | A | 十分に達成している。 | (80%以上) |
| | B | 概ね達成している。 | (60%以上) |
| | C | あまり十分でない。 | (40%以上) |
| | D | 不十分である。 | (40%未満) |

自己評価（分析、計画、取組、評価）

| 番号 | 計画・取組 | | | 評価（3月24日現在） | | | | |
|----|------------------------------------|----|--|--|-----|---|--|---|
| | 重点目標 | 現状 | 具体的取組 | 評価項目と評価指標 | 進捗度 | 進捗状況 | 今後の改善方策 | |
| 1 | 主体的に学ぶ意欲を向上させ、基礎的教養を形成する。 | B | <ul style="list-style-type: none"> 特に、1年生では少人数学級を実践し、生徒個々を丁寧に指導することで中途退学及び原級留置者の減少に繋げる。 基礎学力の定着を目指し、校内支援体制（面談・教育相談・SC・SW）の活用とともに積極的な保護者連携を図り、生徒実態の把握を適切に行う。 学力の基礎力診断の実施と活用を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> 中途退学者及び原級留置者の前年度比2割減。 成績不振者の前年度比2割減。 生徒の情報を家庭と共有するための積極的な連携ができていますか。 学力診断結果を受けての学習指導の充実を図り、学力向上に繋がったか。 | C | 定員割れにより少人数学級となったが、中途転退学者が、前年度比約4倍となり、減らすことができなかった。 | 生徒の様々な情報を全職員で情報共有し、管理職を含め、チーム一丸となって対応するには、まだまだである。職員と家庭、職員同士の意思疎通をさらに強めるとともに、多方面との強固な連携を持ってチーム力の向上を図る。今一度、授業を大切に、授業研究とともに生徒の学習意欲向上を図る。 | |
| 2 | ルール・規則を守る（自律する）力を育てる。 | B | <ul style="list-style-type: none"> 生徒個々の情報共有から問題行動を未然に防ぐ取組を進める。 薬物乱用や喫煙の防止への啓発活動を充実する。 アセンブリや個々の指導から規範意識向上の機会の充実を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> 特別指導及び懲戒処分件数の前年度比2割減。 薬物に関する講演会の年1回以上の実施及び喫煙防止への啓発通信の月1回の発行。 学年別アセンブリを学期に2回以上実施。 | C | 未然防止以前に事後処理に時間を費やしてしまい、前年度比約3倍となった。 | <ul style="list-style-type: none"> 喫煙防止への啓発及び校内巡視等積極的に行っているが、あまり効果を得られなかった。 アセンブリ等の回数を増やしており、ほぼ指標どおり行うことができた。 | 教職員全体で取り組む姿勢を確立させ、問題行動の未然防止、規範意識の向上等生徒個々の意識向上を図り、よりよい成人となるよう指導、支援を続ける。 |
| 3 | 自他を理解して協調する力を育て、自己の将来設計を支援する。 | B | <ul style="list-style-type: none"> 中学校訪問や生徒面談及び家庭との積極的な関わりにより、生徒個々の課題について理解、把握に努める。 生徒のキャリア形成を支援し個々に応じた適切な進路指導を実践する。 | <ul style="list-style-type: none"> 生徒の情報共有のための学年会議を月1回以上実施。 キャリアパスポートの有効的な活用と学期に2回以上の進路LHRの実施。 | B | 学年会議の月1回開催は、指標どおり定着した。 | <ul style="list-style-type: none"> キャリア教育については、現生徒に対して最適な支援、指導を早急に構築する必要がある。 | 学年会議のさらなる充実とともに、分掌間連携を強固に進めていくことで、生徒支援（生徒個々の課題やキャリア形成）に抜かりのない体制を構築していく。 |
| 4 | 部活動の積極的な参加推進と地域のボランティア活動への参加を奨励する。 | B | <ul style="list-style-type: none"> 部活動離れを止めるために教員の働きかけも含めた積極的な活動参加を促す。 ボランティア活動を生徒会活動の一つとして位置づける。 | <ul style="list-style-type: none"> 部活動実活動数を全校生徒の4割以上。 ボランティア活動参加者数年間のべ100名以上。 | C | 全国レベルの体育部には全生徒の約25%が活動しているが、他は活動が少ない。文化部は、地道に活動を続けているものもある。 他団体との連携等によるボランティア活動は、ほぼ指標を達成できた。 | 校外各所との連携を深め、生徒会活動の活性化とともに生徒の自己肯定感を高めていくための活動を続けていく。そのことを学校活性化に繋げる一助にしていく。 | |

学校関係者評価（2月22日実施）

○生徒による学校評価の結果から
学校生活全般に関して肯定的な意見が多い。特に、校内美化や個々のルール違反等を指摘する意見もあり、自分たちの学校を自分たちで良くしていこうとする機運も見られた。このことから多くの生徒が、学校生活をよりよく充実したものにしていこうとする姿勢が感じられた。

○外部、保護者からの意見等
地元の方々からは、本校の取り組み等に対して一定評価いただいております。今後、さらに地域と結びついた活動を発展させていく必要がある。さらに、本校PTAからも同様の意見をいただいております。PTAと連携しながらの新しい取り組みを構築していく。

○生徒による授業評価の結果から
授業内容や進度等に関して、肯定的な意見が大多数を占め、年々増加の傾向である。また、学校設定科目である「教養基礎」は基本的な生活習慣の確立に非常に有意義であり、生徒が学校生活を行う上での、礎的なものになっている。
一方、調査期間中も含めて、家庭での学習を行わない生徒の数も増加傾向にあり、「学習環境」の問題も看過できないが、「学習意欲」をかき立てるように、教科だけではなく、学校全体として対策を考えていく必要がある。